



おす、おじさんずーと
こりたかっただよ……♡

依存姪っ子は
おじさん精子で孕ませ希望です♡



「おじさんのお嫁さんになるもん」と
ちょっと過激なアピールをする、煙のみるちゃん。

うんなみるちゃんと数年ぶり再会したが…
「みるは、おじさんのお嫁さんだから…」
あの時の思いはあんまり変わっていないようで…

「おじさん…みると、エッチしよ…?」



おっぱいも、おまんこもおじさんのモノ。
大事な大事な処女も...
お尻も子宮も卵もぜ〜んぶおじさんだけのモノ。

基本7枚+立ち絵2枚
ストーリー差分83枚



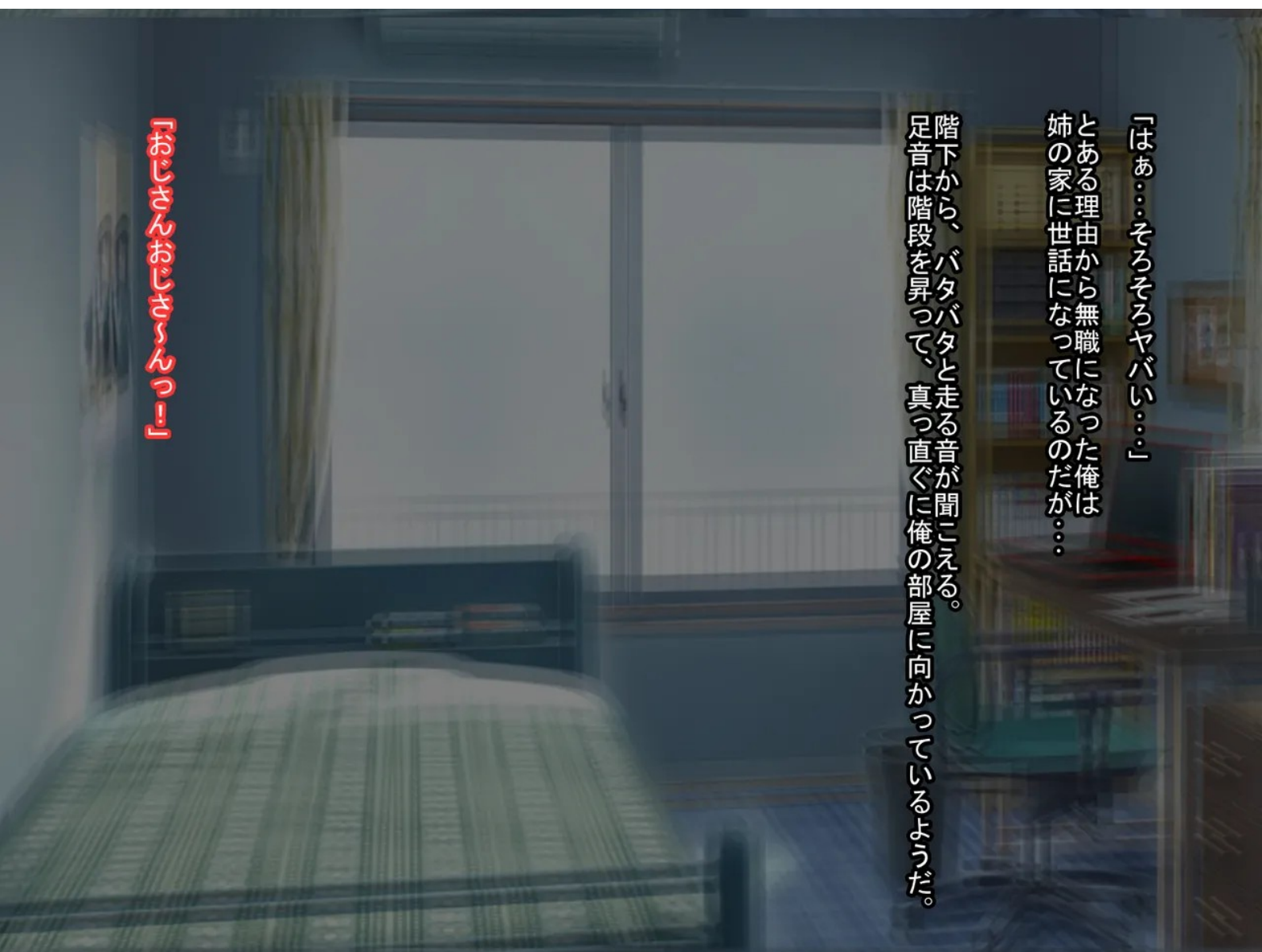
依存姪っ子はおじさん精子で孕ませ希望です♡

「はあ…そろそろヤバイ…」

とある理由から無職になった俺は
姉の家に世話になっているのだが…

階下から、バタバタと走る音が聞こえる。
足音は階段を昇って、真っ直ぐに俺の部屋に向かっていようだ。

「おじさんおじさんっ!」



「あ、おじさん！居た！」

「や、やあ…おかえり、みるちゃん」

「この娘は、みるちゃん。
姉の子であり、つまり俺の姪っ子だ。」

「おじさん今日もみるとあそばさー♡」



「何度も言ってるけど
俺はまだおじさんって歳じゃないよ、みるちゃん」

「いいのいいの、おじさんでも
ちゃあんと、みるが面倒みてあげるから♡」

みるちゃんが、体を密着させて纏わりついてくる。
これが「そろそろヤバイ」理由である。

「ねーねー、おじさん
なにで遊ぶ？なにで遊ぶ？」

「そうだなあ、じゃ、じゃあゲームでも一緒に…」

俺の提案にみるちゃんが
あからさまに不服そうな顔をする。



何故だかわからないが
みるちゃんは俺のことを非常に気に入られたらしい。
それが、懐いてくれる、レベルならまだ可愛いのだが…

「むー、みるもっと他の遊びしたいなあー」

「おじさんともっと大人な遊びしたいー」

お嫁さんになる、と言ってくれるのは嬉しいのだが
大人な遊び、はちよつと困る。

「みるは、もう大人なこともできるもん
おじさんのお嫁さんになるもん、エッチなことかも…」

そう言いながら、少しだけ膨らんだ胸を押し付けてくる。



「そ、そういうのはみるちゃんにはまだ早いから…」

若くしてみるを産んだ姉の遺伝だろうか
やたらと肉体的接触を求めてくる、みるちゃん。

「もうっ、みるを子供扱いしてっ…
こーなったら…、おじさんほらっ!」

「じゃーん」



スカートをまくり上げ
ドヤ顔でぱんつを見せてくる、みるちゃん。

「ふふん おじさん興奮した？
みるの おぱんつ見て興奮したでしょー」

純真なドヤ顔は可愛いけれど
その行動に呆れてタメ息が漏れた。

「みるちゃんのパンツなんて見ても興奮しません」

「えええっ！でもでも
これ、みるの勝負ばんつなの！」



「ふー」そんな単語覚えてくるのみるちゃん...」
「というか綿 100%みたいな勝負パンツ見せられても...

しかし、そうは言っが
これまで女に縁の無かった、童貞の俺にとって
いくら姪といえども、その下半身について視線が向いてしまう。

うーん、下着は子供っぽいが
下半身がむちむちしててエロい気もしてきた

「あーおじさんそんな上手いところを
みるのおばんっ じーと見てる…♡」



「やっぱりみるのことが好きなんですよー♡」

「またそんなことをして…
さ、はやくスカートおろしてよ…」

「んふふ♡そーしてーあいたね♡
じゃあじゃあ、おじさんにはうつておきのサービースしちゃおう♡」

「スカートをあげることにやうな手を伸ばすよ…」

「はいっ♡」

ずるっ♡

さっとパンツを下ろしたみるちゃんが
真っ白で綺麗な下半身をさらしていた。

「み、みるちゃん！おまた、おまた見えてるからー」

狼狽えはするが
視線はみるちゃんの割れ目から離せない。

「うん♡みるのおまた見ていいよー
おじさんなら、みるのエッチなおまた見せてあげる♡」



「お、おまつ、おまん…」

「あー、やっぱりいいー♡
おじさん、みるのおまたに興味津々だっ！」

止めなければと思うても
初めて見る女の子の卑猥な割れ目に目が離せない。

「ほらほら♡好きなだけ見ていいんだよ♡」

じゅん♡

つるつるの無毛で
誰にも汚されたことのない無垢な割れ目。

「綺麗すぎ…♡…H回…」

「ってダメダメ！
みるちゃんっ、そこはそんな簡単に見せちゃいけないの！」

興奮して膨らんだ股間を悟られないように
みるちゃんから、飛びのくように離れる。

「えー、じゃあどうしたら見せていいのー！」

「ほ、結婚する人とか…
とにかく大事な人に見せちゃいけないのっ」

「みるほ、おじさんのお嫁さんになるんだもん
だからおじさんには、おまた見せてもいいんだもん」

「いやいやいやあ本当にお嫁さんになったらねー
と、誰かくん、お嫁さんでいいよ」



みるちゃんと、そんなことが何度もあつて
俺は慌てて就職して、姉の家を出た。

あのまま姉の家で世話になっていたら
みるちゃんの成長の妨げになってしまふかもしれない。

別れの際、みるちゃんが悲しむかと思ったが
意外とあっさりと送りだしてくれた。

『おじさん、みる待ってるからね…❤️』

そう言つて静かに笑うみるちゃんは
何度も、待ってるからね…と呟いていた。

そして数年後…

「戻ってきてしまった…」

仕事でヘマをやらかして無職になった俺は
再び、姉の家で世話になることになったのだ…。

「ありがとう、姉さん。っーかごめん」

「いいのいいの、気にしない気にしなさい
それより、みるもずつと会いたがってたから喜ぶわ」

昔の思い出を掘り起こしてみるちゃんの姿を思い浮かべる。

「あの頃はお嫁さんになるとか言ってくれてたなあ…」

しかし、俺が再びこの家に世話になると決まった時も
荷物を運びこむ時も、その姿を見せることは無かった。

「まあみるちゃんも今更おじさんが相手じゃなあ…」

そりゃそうだ、と思う。

むしろ小さな頃の
あんな思い出が嫌で会いたくないのかもしれない。

「彼氏とかもいるのかなあ…」

コンコンッ

「ん、姉さん？」

「おじさん…だよな？」

「…みるちゃん？」

「うん、…ひき、久しぶり」

みるちゃんは気まずそうにおどおどしている。

（そういえば姉さんが…）

ちよつと引きこもりになってる…みたいな事を言っていたな。



目の下に濃いクマできてるし
みるちゃんも数年で色々あったんだろう…
とりあえず当たり障りの無い会話で…

「お、おっきくなったね、みるちゃん」

「え、えつと…おっぱいが…？」

「いや、えつと
そこだけじゃなくて…全体的にね」
予想外の返しに俺がドモってしまった。

「おじさんは変わってない…かも」

「あ、ははは…酷いなあ
これでも色々成長したつもりなんだけど」

「みるが好きなおじさんのまま…よかった♡」



みるちゃんがなにかボソボソ言っているがよく聞こえない。
とりあえずジョークの一つでも言ってごまかそう…。

「ま、まあおじさん仕事ばっかで
成長したって言っても、彼女の一人もできなくてさー」

「……うん」

「おじさんいまだに童貞だよーって、ハハハ」

「童貞…ふふ♡」

(お、ウケたかな…?)

ちよつときこちない感じだけど笑ってくれたようだ。
やはり今時の子だから、ちよつと下ネタくらいがウケるのかな。

「みるも、…彼氏いないよ」



「そっか、みるちゃんも今はフリーなのかー
可愛く育ったのにもったいないぞー?はは」

「ううん…ずっと、いないよ
おじさんの事…ずっと、ずっと好きだったから…」

「…えっ」

「これからよろしくね、おじさん…♡」

みるちゃんの発言に空気が固まった。

何やらご機嫌そうに、くすくすと笑いながらみるちゃんは自室へと戻っていった。

「い、いや…引きこもりのせいで
ちよつと内気になってるだけかな…？」

昔と同じで発言が過激なだけで、普通に接してあげれば
もしかしたら引きこもり脱却の力になれるかもしれない。



「ようし、そうと決まれば
荷物整理が落ち着いたら、ゆっくり昔話とかしてみよう」
しかし…そんな決意は予想外の形で裏切られるのであった…。

姉とみるちゃんと俺、3人で夕食を終えて
みるちゃんと昔話でもしようかと、彼女を部屋に呼んだ…のだが。



「お・じ・さん…♡」

なんでこんなことになった。

「おじさん、どうしたの…?」

どうしたの…？
みるのおっぱい嫌い…？』



昔と比べて、非常に豊かに膨らんだ胸をさらけだして
潤んだ瞳で俺を見つめる、みるちゃん。

『みる…ずっと待ってたんだよ、おじさんが帰ってるの…』

ちよっと状況に頭がついていかない…。
というかみるちゃんが体を擦りつける様に密着してる。

『ねえ…おじさん♡
みるのおっぱい♡ おじさんの為におっきくなったんだよ…♡』

「あ、みるちゃん…」んんのは好きな人…」



「みるちゃん…」♡♡♡

♡♡♡みるちゃん♡

いや、みるちゃんの、なんというか…
空氣的に本気で俺の事を想ってくれてた…のだから。

「あ、あのあの俺童貞で…」んんのさきなら…」

慌てふためく俺の腕を抱くように
生のおっぱいを、ぎゅっと押し付けてくる。

「おじさん♡みるはね、ずっとずっと…
ずっと待ってたよ?…ダメ?」



ふふふふ

みるちゃんが、俺の手を掴んで自分の胸へとそっと誘う。
初めて触る女の子のおっぱいは、温かくて柔らかかった。

「うっわわあわ…やわっ…」

「お・じ・さ・ん♡
怖がらなくていいよ…?」
みるのこと、おじさんの好きにしていんだよ…?」

信じられない程の柔らかさで、理性も溶けていく。
壊れものを扱う様に、ふにゅふにゅと揉んでみる。



「んっ…っ♡おじさんの手…っおじさん…っ♡」

「なるっちゃっのぉおじさん♡おじさん♡おじさん♡」

「ふふ♡おじさんの為に育ったから…
おじさんが喜んでくれて嬉しい…っ♡」

しばらく夢中で触っていると
段々とみるちゃんの息が荒くなっている。



『おじさっ…ん、触り方…えっちいよお♡』

そんなこと言われても
エッチな事してるんだから仕方ない。
というか加減とか上手にとかはできなからず…。

『ねえ おじさん…。
触るの…おっぱいだけでいいの？』

みるはそう言うとベッドに腰かけ
大きく足を開いて、大事な部分を見せつけてきた。

「おじさん……みるの……も、……触る？」



「ほ、ほら…みるのまんこだよ…おまんこお…♡」

姪っ子のそこは、昔見たままの
つるつるで無垢で綺麗な割れ目だった。

「お、おまんこ…しかもパイパン…♡」

「どう…？みるの、お、おまんこ…♡
おじさん好みの…おまんこかな…♡」

「うんっ、うん…パイパン…びっぴり開いて…
こんなに綺麗でエロなおまんこ…そうはならぬよー」

「ふふっ…ふふふ♡
うみふふ♡おじさんに気に入ってもらえて嬉しい♡」



「ほ、ほら…見て？
みるの雌まんこが…、お、おじさんに愛されたいよって
おまんこのえっちなお汁がいっぱい溢れちゃうの…♡」

「みるちゃん…そんなエッチな言葉ばかり覚えて…」

「昔おじさんが隠してたエッチな本で覚えたのお…♡
おじさんに喜んでもらいたくて…♡」

ドキ

「わあ」

♡

ドキ

「じゃ、じゃあ触るよう
みるちゃんのおまんこ、触っちゃうよ」

「うん…♡
みるのまんこ、えっちなおまんこ…触って♡」



「んっ♡んあぁっ…♡」

割れ目を指でなぞると、みるちゃんが小さく喘ぐ。
指先にはぬるつとした愛液が糸を引いた。

「うわ…めっちゃくちや濡れてる…
みるちゃん、おっぱい触られてこんなに興奮したんだ？」

ドキ

（わあ）

（わあ）

♡

♡

ジュン

ドキ

ジュン
ジュン

ぬる♡

「うん…♡おまんこ汁でいっぱい濡れちゃうの…
おじさんは、いっぱい濡れちゃうエッチなおまんこはきらい…♡」

「好きにきまってるー」

もつと奥までみるちゃんの全てを見る為に
濡れた割れ目を指で思い切り広げた。

「あっ、あ…見られてる…♡
みるのえっちまんこ…全部見られちゃってる…♡」

広げて見ると、みるちゃんの膣肉が濡れて卑猥に光り
雄を期待する雌だとアピールするようにビクビクと動いていた。

「恥ずかしいよお…♡」



回ではそう言っているが、抵抗のそぶりすら見せず、卑猥なおまんこをさらけ出してやる。
「みるちゃん、エロすぎだよ…」

「お、おじさん…童貞なんだよね…
じゃ、じゃあみるのおまんこが初めて見る、おまんこだよね…♡」

「そうだよ、俺が初めて見たおまんこ
みるちゃんのごんなにエツデなおまんこなんだよ」



「あ、あのね…みるも、し、処女だからあ…♡はい♡
おまんこ見られちゃうの初めてで…ドキドキしてる…♡」

「そう言われて広げたおまんこを覗くと
膣口を覆う様な薄桃色の薄いヒダが処女の証を主張していた。」

「あっあっ♡見てるう…おじさんが
おじさんが、みるのおまんこ広げて処女膜見てるよお…♡♡」

みるちゃんが躊躇無く繰り返す淫語が興奮を高め
ズボンの中で息子が痛いくらいに勃起しているのがわかる。

「あ、あ……おじさん……の
お、おちん……ちん♡おっきしてる……♡」

無言でズボンを下ろし
みるちゃんに見せつけるように息子をさらけ出した。

「おちんちん……♡
おじさんの……かちかちの……勃起ちんちん♡」

「みるちゃん……挿入れていい？」

みるちゃんは短い吐息を漏らしながら頷いた。



「あつ、あつ……おちんちん……っ
処女膜に当たってる……えっちな、……ちゅーしちゃってる……♡」

龟头部分しか挿入れてないのに
みるちゃんの粘膜が奥へ奥へと誘うように絡みついてる。

「みるちゃんの処女、もううからねっ……っ」

「うん……♡おじさんの為に、と、とっておいた
みるの初めておまんこ……だから……♡」

「くっ……っ」

弱々しい抵抗を奥に押し込む様に
ぐっとな力を入れて、一気に腰を突き入れた。



「んっ……んああっ……」

「うわ……みるちゃんの処女まん……熱っ……」

「ぷっん、と処女膜を破いた感触の後、
柔らかい肉がぎゅーっと痛いぐらいに締め付けてくる。」

「みるちゃんっ、そんなに締め付けたら……っ」

「膣全体が雄に射精を促すように
熱い愛液と一緒に絡みついている。」

「お……おじ……さんっ、おまんこが……
おじさんのおちんちんで……おまんこが熱いよおっ……♡」

「みるちゃん射精ちゃうって……うっうっ」

「処女喪失の痛みに喘ぐみるちゃんを他所に
初めての雌穴の感触にたまらず射精してしまった。」





「はあっ……♡はあ……んや♡
中出ししてもらえたあ……は、初めてだったのに……♡」

「あっ……みるちゃん……中出しっ……」

「しちゃってごめん……と言おうとした所で止まる。
みるちゃんは”してもらえた”と言った。」

「嬉しい……♡お、おじさんの精子……♡♡
おじさんの精子が、みるのおまんこの中だ……♡」

みるちゃんの中から引き抜くと同時に
愛液と精液の混ざった卑猥な液体が首を立てて溢れ出した。



『おじさん……♡み、みるの処女まんこで……
き、気持ち良く……童貞卒業できた……♡』

ニツヨリと笑顔で問いかけてくる。
みるちゃんの言葉は本心から発言のようで
本気で処女喪失と中出しを喜んでるようだった。

「みるちゃんの処女……
気持ち良すぎてこんなにめちゃったよ」
頭を撫でてやると、昔のようなベツと明るい笑顔を見せてくれた。

『ねえ……おじさん♡』



みるちゃんは、硬いままの俺の息子に白い指を這わせ
そのまま、そっと自分の膣へと誘う。

「ね♡初めての…せ、セックスだから…
まだみるのおまんこ、ぐちゅぐちゅすぽすぽ…したいよね？」

「もう一回してもいい？処女だし痛くない？」

ぽちゅ♡

「う、うん…♡あのね…熱い精液…
びゅるびゅるって子宮に出してもうの…
すごい…き、気持ちいいの…♡」

「じゃあ、もう一回」のまませックスすぽすぽ」



中出した精液が潤滑油になって
かき回す度にぐっちゅぐっちゅと卑猥な音が響く。

「みるちゃんっ、みるちゃんのおまんこっ」

「おちんちんっ♡おじさんのおちんちんっ……♡
みるの子宮に届いてるのぉ……奥にずんずんくるっ……♡」

「気持ちいいっ♡おまんこ気持ちいいよ♡
もっどぐちゅぐちゅしてっ……♡
おじさんの精液……まんこの中に擦りつけてっ♡」

「ずっ♡」

「ぐっ♡」

「突きする度、それに合わせるように
みるちゃんの雌の部分が、きゅうきゅうと締め付ける。」

「お、おじさん……。っ、もうダメっ♡
みるダメなのっ♡おまんこイっちゃうのお……。っ♡」

みるちゃんが体を震わせて迫る絶頂を全身で訴える。
膣内も激しく痙攣して、少しでも早く精液を搾り取るうと
強く締め付けて射精を促してくるのを感じる。

「みるちゃん、俺ももうイクよっ
もちろんこのまま生で中出しするからねっ？」

「うんっ……。♡中出し……。い♡
おじさんの精子♡みるの処女まんこで受精させてえ……。♡」

今更抜く気なんて無い。
みるちゃんの返事の途中で
もう精液は膣内で射精する態勢になっていた。

「射精すよ射精すよっー！
みるちゃんの処女まんこに連続中出しするよっー！」



2度目の射精もすぐにおさまることなく
みるちゃんの膣内や子宮の中まで
容赦無く雄の色に染めていく。

[illegible]

「熱いよおっ♡おまんこ熱いっ♡」
処女おまんこで、受精しながらイっちゃうのおっ♡」

どくどくと注がれる射精に合わせて
みるちゃんが何度も体をびくびくと跳ねさせた。

ハ
ハ
ッ
♡

みるちゃんが、満足そうにお腹を撫でながら
自分の膣内から零れる精液を、潤んだ瞳で見つめていた。

「ああああ…気持ちよかった…
うう、遂にみるちゃんとセックスしちゃうとは…」

「みるも…お、おじさんのおちんちん…♡
いっぱい中出ししてもらえて…気持ち良かった♡」

「おじさんので…に、妊娠したかなあ♡」

あああ…後先考えずに中出ししたけど
中出しってつまりそういう事なんだよなあ…。

「おじさん…どっしたの…♡」

姉さんにどう説明するか――

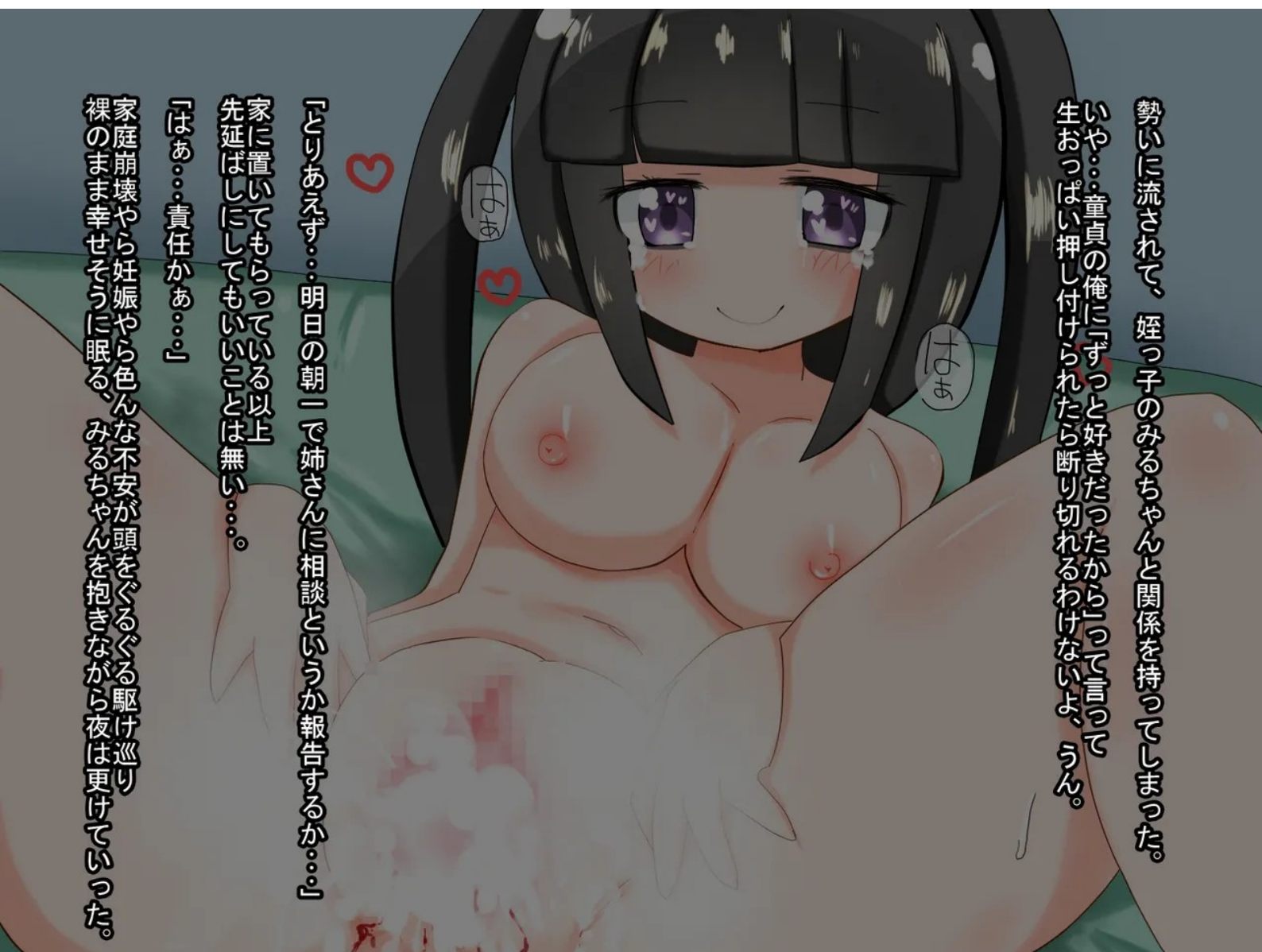


勢いに流されて、姪っ子のみるちゃんと関係を持ってしまった。
いや……童貞の俺に「ずっと好きだったから」って言って
生おっぱい押し付けられたら断り切れるわけないよ、うん。

「とりあえず……明日の朝一で姉さんに相談というか報告するか……」
家に置いてもらっている以上
先延ばしにしてもいいことは無い……。

「はぁ……責任かぁ……」

家庭崩壊やら妊娠やら色んな不安が頭をぐるぐる駆け巡り
裸のまま幸せそうに眠る、みるちゃんを抱きながら夜は更けていった。



翌朝――

3人で朝食を囲みながら、俺は意を決して……

「あ、あの、姉さん……ちょっと大事な話というか……」

「あー、みるの……?」

さらっと答える姉。

まさか……昨晚の情事の音を聞かれていたのだろうか
考えてみれば、周りの事など考える余裕は無かった……

「いやあ、あんた押しに弱いタイプだとは思ってたけど
まさか1日で落ちるとは……、みるーハイこれ」

「ハイ」

なにやら姉が、しぶしぶといった感じで
みるちゃんに1万円を渡していた。

「え……なに、えっと……なに?」

「いやね?みるが何日であんたを落とせるかって賭けてたのよ」

あっけらかんと笑う姉の姿に
力が抜けてその場にへなへなど座り込む。

「つーか俺が落とされるのは前提の賭けなんかい」

「だってあんた意思弱いじゃない
しかも、みるは娘ながら巨乳だわ可愛いわで……
ぶっちゃけあんたこーいうの好みでしょ?」

――南無。

「お・じ・さ・ん♡」

「みるちゃっ・・・て、うわっ!」

仕事に行く姉を見送り
任された家事が終わって部屋に戻ると、みるちゃんが待っていた。

「・・・♡♡」

何も言わずにするすると下着をおろし
俺の目の前で下半身をあらわにする。

「み、みみみるちゃん、まだお昼前だけど・・・?」

「・・・おじさん♡」



「…おじさん♡
みるね…おじさんと…エッチしたいよぉ♡」

昨日の今日でなんとなく気恥ずかしいのだが
女の子はそうでもないんだらうか…

ふーっ♡

ふーっ♡

ニキ♡

「お、おじさんが…みるの処女もらったから
朝からずーっとおまんこがきゅんきゅんしてるの…♡」

くすくすたそっけな身をよじらせてみるちゃんが誘惑してる。

「みるの、えっちおまんこがおじさんを欲しがってるの、
昨日みたいに、おちんちんで奥までぐちゅぐちゅして、
あつ…♡」



「で、でもみるちゃん
エッチばかりしてちゃいけないような」

何がいけないのかわからないが
状況に混乱して、何の中見もない言い訳をしました。

ふーっ

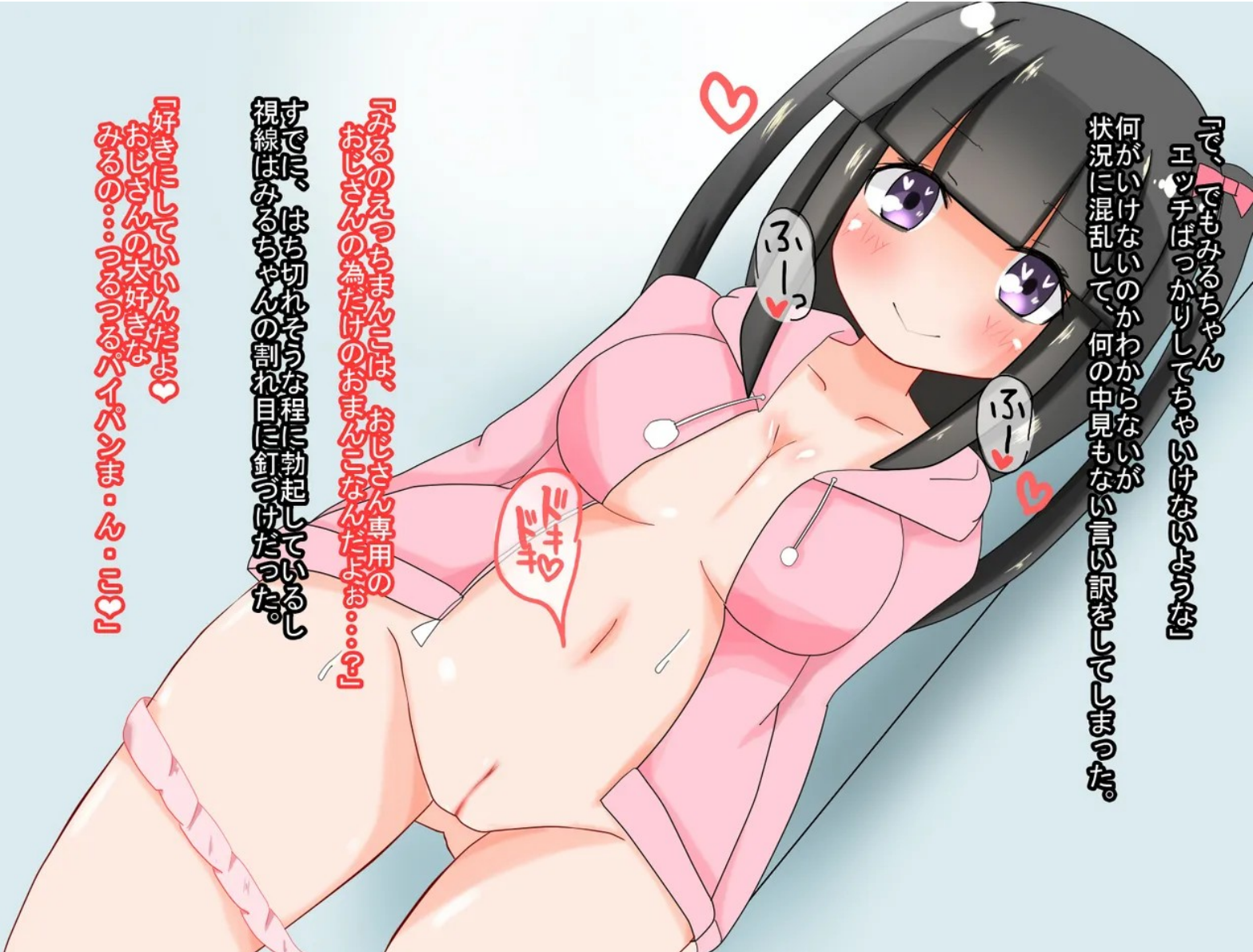
ふーっ

ドキドキ♡

「みるのえっちゃんとは、おじさん専用の
おじさんの為だけのおまんこなんだよ……？」

すでに、はち切れそうな程に勃起しているし
視線はみるちゃんの割れ目に釘つけだった。

「好きにしていんだよ♡
おじさんの大好きな
みるの……っるっるパイパンま……ん……♡♡」



淫語で攻めてくるのズルい。
昔の王口本、盗み見されていたみたいだし
淫語とかパイパンとが大好きなの完全にバレている。

「はあ、じゃあ一回だけだからね」

1回ならいいなんて理由は無いが
平日の昼前にセックスするいう状況に
とりあえず言い訳をしておく。

「ふふ、やった……♡
エッチしてもらえる……♡
みるのおまんこ可愛がつてもらえる……♡」

ベッドに腰かけ、隣をポンポンと叩くと
みるちゃんは嬉しそうに隣へと座り、身を任せてきた……。





みるちゃんは待ってましたとばかりに、さっさと服を脱ぎ
生まれたままの姿で、ころんと横になり大きく足を広げた。

「みるちゃんの体…やっぱりエロ…」

「おじさん好みに……そ、育ってる……?」

片手では零れるような爆乳に、真っ白で大きなお尻
ぴったり閉じてるっつるのすじまんこ…

「完璧」

「ブイ」

親指をぐっと立ててやると
間髪入れずに、みるちゃんもブイサイン。

1日経って改めて見ても
相変わらず完璧なパイパンまんこだ…。
見ているだけで、勃起しすぎて痛い。

「おじさん…おまんこはと見てる♡」

「昨日まで童貞だったからなあ
まだ見るだけで射精しちゃうくらいH回く見える」

ふふ♡

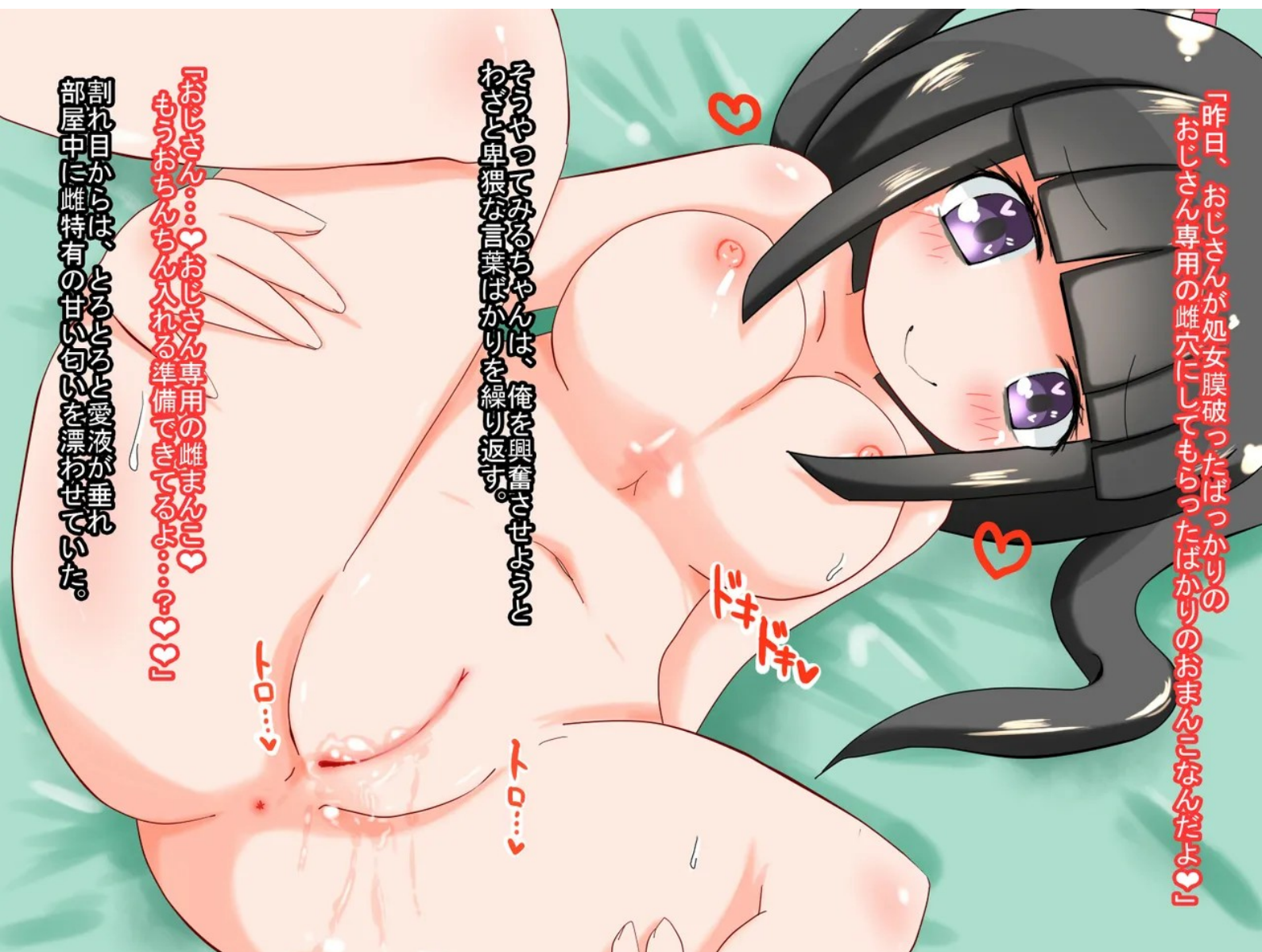
ドキドキ♡

「昨日、おじさんが処女膜破ったばっかりの
おじさん専用の雌穴にしてもらったばかりのおまんこなんだよ♡」

そっやってみるちゃんは、俺を興奮させようと
わざと卑猥な言葉ばかりを繰り返す。

「おじさん……♡おじさん専用の雌まんこ♡
もうおちんちん入れる準備できてるよ……♡♡♡」

割れ目からは、とろとろと愛液が垂れ
部屋中に雌特有の甘い匂いを漂わせていた。



「ふわあ……っ♡
これ……き 今日一日……
ずっとこれが欲しかったよお……っ♡」

挿入すると、反射的に膣肉がぎゅっと締め付けてくる。
心なしか、昨日よりも俺のものの形に馴染む気がした。

「んあぁっ♡き、昨日よりも
おちんちんの形がびったりハマってるよお……♡」

みるちゃんも同じように感じていたらしい。

「嬉しいよお……♡みるのまんこがっ……
おじさん専用の雌まんこになった証拠なのお♡」

みるちゃんの膣内でガチガチに勃起したそれを
更なる快感を食る為に、膣内に押し入れていく。

ずぶら…♡

「あああつ、みるちゃんのおまんこっ
「突きするだけで射精そうになるっ…」

「ああんっ♡あつ、あんっ♡
おじさんっ…い、いきなり激しいよっ♡」

「痛いかな？」

「ううんっ、気持ちいいっ♡
おまんこの中ぐちゅぐちゅ擦れるのすきっ♡
おまんこっ♡おまんこ気持ちいいよお♡」

ぱちん♡

ぱちん♡

「じゃあもっと早くするわっ」

言うが早いかな、体は快感を求めて
腰の動きが勝手に早くなってるわっ。

「おじさんっ♡みるイっちやうっ♡
おじさんのおちんちん気持ち良すぎて…♡
とろとろえっちおまんこでイっちやうよお♡」

昨日も感じた、膣内の締めり
みるちゃんがイク時の合図だ。

「俺もっ…射精すよっ！
えっ！出して欲しいか言ってっ！」

「なかつ♡まんこの中に欲しいっ♡
処女膜破ったばっかのおまんこにっ…
おじさんの精子受精させてえっ♡♡」

「いっぞっ！俺の精子受精しろっ！」

ぱちん♡

キュンレ

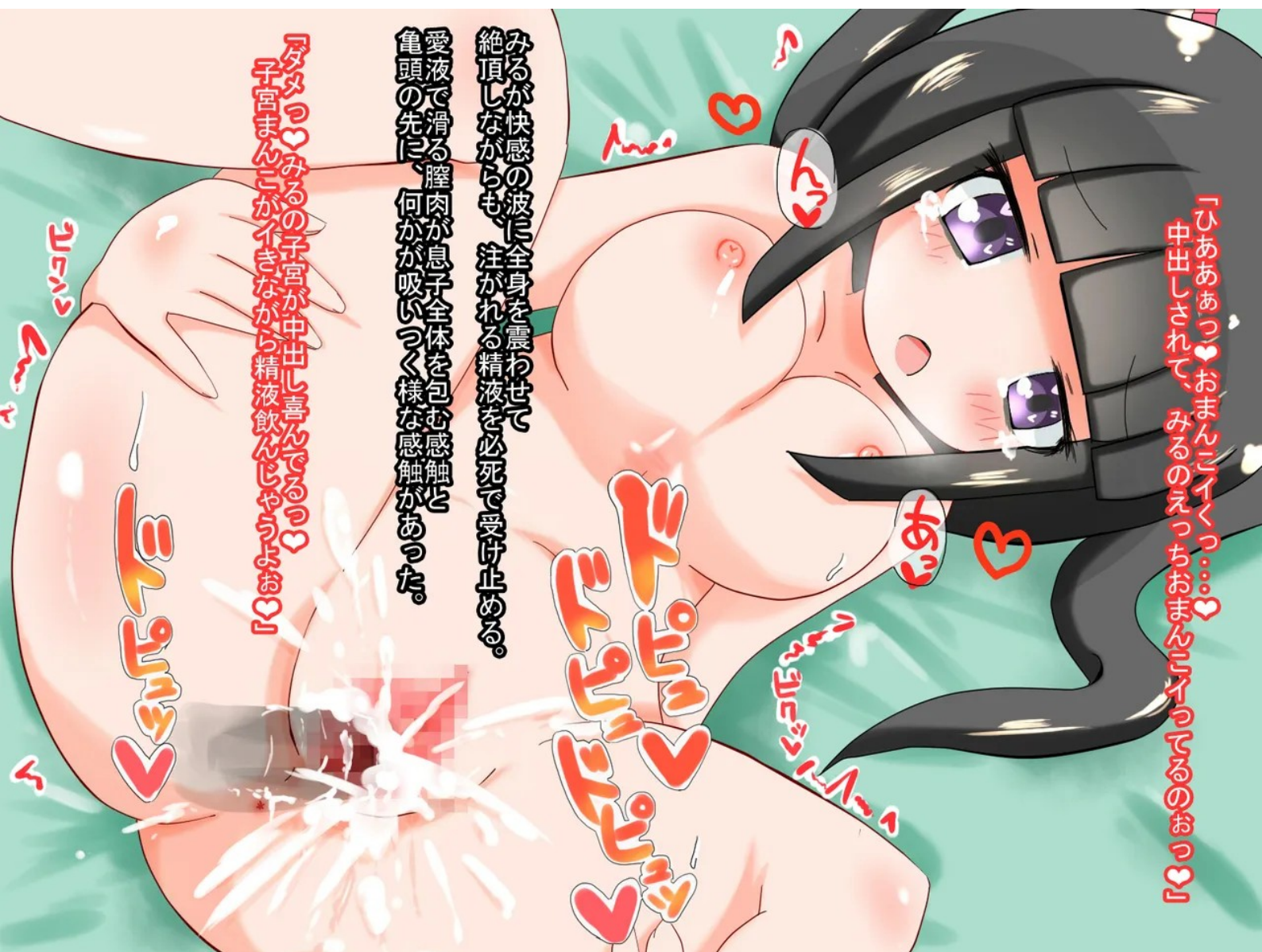
ぱちん♡

「ひあああつ♡おまんこイッくっ…♡
中出しされて、みるのえっちおまんこイッてるのぉっ♡」

みるが快感の波に全身を震わせて
絶頂しながらも、注がれる精液を必死で受け止める。

愛液で滑る膣肉が息子全体を包む感触と
亀頭の先に、何かが吸いつく様な感触があった。

「ダメっ♡みるの子宮が中出し喜んでるっ♡
子宮まんこがイきながら精液飲んでじゃうよぉ♡」



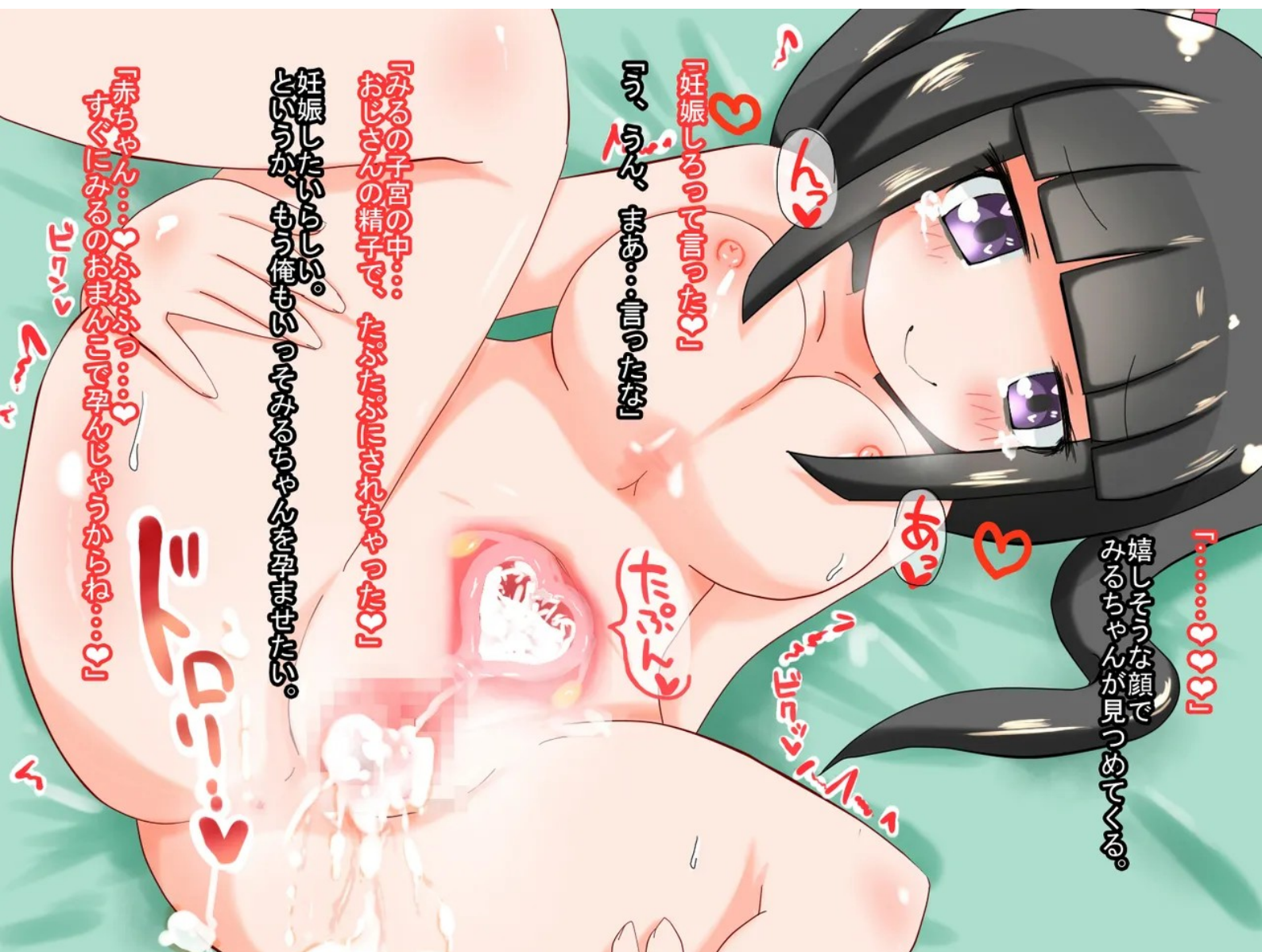
「じゅせえっ…受精、してるぅ…♡
みるっのえっち子宮でおいさん精子受精しちゃうっ…♡」

「ああっ、受精してっくらぞ…
妊娠していいから、孕じゃっくらなっ…」

雌の雄の本能を回走りながら
雌の子宮にひちゃびちゃと子種を染めこませっくらへ。

「妊娠っ、妊娠しゅるっ♡
えっち子宮でおいさん精子受精して…
おいさん専用の…妊娠まんこになりたいよおっ♡」





『……………♡♡♡』

嬉しそうな顔で
みるちゃんが見つめてくる。

『妊娠してるって言った♡』

うん、まあ…言ったな

『みるの子宮の中…
おじさんの精子で、
たぶたぶに妊娠しちゃった♡』

妊娠したいらしい。
というか、もう俺もいつそみるちゃんを孕ませたい。

『赤ちゃん…♡ふふふ…♡
すぐにみるのおまんこで孕んじゃうからね…♡♡』

みるちゃんは幸せそうにお腹を撫でる。
子宮内に満ちた精子を愛おしい我が子の様に。

「いや、流石に早いって」

「…お、おじさん？」

(まさか妊娠までのスピードも賭けたりしてないだろうな)

「じつないよ」

「一瞬、心を読まれたのかと動揺したがどうやら違っらしい。
みるちゃんはおなかを撫でながら、残念そうに言った。

「妊娠」

「あ、ああ。それってわかるの？」

「今日、だ、大丈夫な日だから…」

安全日ってやつか。

「ねえ、おじさん…♡」

みるが危険日の時でも…中出ししてくれる？」

逆プロポーズかこれ。

「とりあえず仕事探すよ」

みるちゃんが妊娠した時、不安にさせないように」

みるちゃんがパツと笑顔を咲かせ、抱き着いてくる。

結局その日だけでも6回も中出しさせられてしまうのであった…。

みるちゃんと恋人になって1週間：（なったのか？）俺も、姉の紹介でついに新しい職が見つかった。

職と収入が安定すればみるちゃんとの関係にも、負い目を持たなくてもいいだろう。親且つ姉公認だし：。

しかし、相変わらずみるちゃんは引きこもりのままだ。簡単な買い物以外、外に出ることはなく俺とセックスばかりの墮落した生活をしている。

「やっぱりその辺もちゃんと言わなきゃ駄目だよなあ：。結婚するにしても、ある程度の自立はしてもらわないと：。」

「お・じ・さ・ん♡」

「あ、ああ：。みるちゃんどうしたの」

まあ、みるちゃんが部屋に来る時は99%セックスしたい：。だから今更聞くのもアレなのだが：。

「。。。ふふ♡」

「おじさん…お、お仕事決まったんだよね…」

「あ、うん、来月からはまた社会人に復帰だよ」

「どうやら改めてその事にお祝いの言葉を言いに来たらしい。」

「またセックスだろうな、と疑ってしまつて罪悪感が…謝罪の気持ちも込めて、ありがとね、と頭を撫でてやる。」

「あ…♡
おじさんに撫でてもらうの…好き♡」



「頭を撫でてやると、子供の様に喜んでくれるのでここ最近でみるちゃんの頭を撫で慣れてしまった。」

「それでね、おじさん…♡
みるからお祝いの、ぷ…プレゼントがあるの…♡」

「これは素直に嬉しい。」

「おー、ありがとだね、何してくれるのかな？」

「はいっ……♡おじさん……♡」

わかってた。

目にもとまらぬ早脱ぎで
お尻をふりふりと、股間を見せつけてくる。

「みるちゃん、エッチしたいだけでしょ」

「お……、お祝いエッチ……？」

なんじゃそりや——

まあでも真つ白で綺麗なお尻と
ぷにぷに割れ目を見せられれば、
反射的に勃起してしまう。

「おじさん……おまんこ……しないの？」

「します」

「ブイ♡」



「おじさんの大好きな…みるのおまんこだよ
お、おちんちん…入れちゃっていいよ？」

触って濡らしてあげないと…
と思うが、すでにみるちゃんの割れ目からは
愛液が漏れだし、いやらしい糸を引いていた。

「ね、ね…？」

遠慮なく挿入れさせてもらうことにする。
みるちゃんの割れ目に息子をあてがうと
くちゅりと粘膜が音を鳴らす。



「んんんっ♡♡
これえ…♡おじさんのおちんちんが
ずぶっ♡って…♡は、入って来る感じ…♡しゅきい…♡」

「俺も、みるちゃんのさ
あったがいおまんこに包まれる感じめっちゃ好き…」

柔らかい膣肉が、きゅっきゅと締め付けてくる。
最初の頃は痛いくらいに締め付けできたのに—

「んっ…み、みるのおまんこ…♡
おちんちんの形覚えちゃってるっ…♡」

みるちゃんの言う通り
膣にタの1枚までが、ぴったり竿全体に
密着するように絡みついて愛撫してくる。



「お、おじさん…あつ♡気持ちいいねっ♡
おちんちんとおまんこぐちゅぐちゅにして
エッチしちゃうの…気持ちいいねえ…っ♡」

「ああつ、みるちゃんのまんこっ♡
俺の形に馴染んで最高に気持ちいいっ♡」

どうしても挿入すると
主導権を握られているような気になる。

「あんっ♡あつ、あん♡
ん…っ♡おじさん専用のっ雌穴だからねっ♡
好きなだけおじさん好みに作り変えていいからねっ♡」

ずっ♡
ぽ♡
♡

ずっ♡
ぽ♡
♡

「みるちゃんっ♡もう射精そうっ♡
射精すよ？俺専用の雌まんこに
俺の精子染みこませるからっ♡」

昇ってきた射精感をぶちまけるように
みるちゃんの最奥へ一気に突き入れた。

「ふあああ♡熱いの出してる♡♡
子宮にびゅるびゅる♡♡♡」

「あああ…みるちゃん♡
精子受精してっ…俺の精子っ…」

「いっ♡してるしてる♡
ちゃんと子宮まんこで精子くっく飲んでるよお♡」



「んあー…気持ち良すぎる…」

自分専用だと言う雌穴に
思う存分子種を注ぎ込んで、雄としての満足感に浸る。

「んっ…♡
せっかく中出ししてもらえたのに…
おじさんのどろどろ孕ませ精液い
こぼって零れちゃうよぉ…♡」

膣からどろりと溢れる精液を見ると
目の前の雌に種付けしたという充足を感じる。

ゴポッ
ゴポ…♡

シロ…こぼれ

精液を垂らすまんこを見てみると
少し悪い感情が芽生えてしまった。
「みるちゃん…ちよつと」

俺はみるちゃんのお尻をぐっと掴んで
もう一つの小さな穴に目がけて一気に息子を突き入れた。

「んぎゃあっ!?!♡♡」

垂れた愛液や精液で濡れていたせいか
意外とすんなりとアナルにも挿入ってしまった。

「おじさっ……ん……そっ……♡♡
おまんこじゃないよお……っ♡♡」

少し苦しそうな声を漏らす
ここ最近、みるちゃんとやりまくっているおかげで
これが快感に耐えている声だと、すぐにわかった。

ぬぶっ…

「みるちゃんはこのうちも

おまんこみたい
に精液欲しがつて
るみたいだねっ」

少し意地悪してやると――

『あんっ♡も、もっ…♡
お尻おまんこはっ♡
プレゼントするつもりだったのに…♡』

どうやら就職祝いのプレゼントは
アナル処女だったらしい…
意図せず受け取ってしまった。

『お尻はごっっ』

『思ってたより気持ちいい…♡』

流石みるちゃん。
天性の正回姤っ子だなあ。

『じゃあ遠慮なく…っ』



膣とは、感じる刺激が違うのか
みるちゃん、の喘ぎもいつもと違う。

「きゃんっ♡ひあっ♡んんっ♡」

「みるちゃんのお尻も
とっても気持ちいいよ、
締め付けキツすぎ…」

ぢゅぽっ♡

ぢゅぽっ♡

「うんっ…みるもっ♡
初めてのお尻エッチ気持ちいいのっ♡」

「アナルの強すぎる締め付けに
どんどん射精感が昇ってくる。」

「みるちゃん、お尻にも中出しっ♡」

「うんっ…!!みるのお尻まんこにっ
おじさんの精液中出ししてえっ!!♡♡」

射精と同時に、締め付けがきゅーっとキツくなり
同時に膣からも愛液が噴き出た。



「おじさあん……♡
こんなに注がれたら
みるお尻で妊娠しちゃうよ……♡」

「アナルからも、おさまりきらなかった精液が
ドロドロと溢れ出てみるちゃんを真っ白に染めていく。」

「おじさん、……気持ち良かった？」

「流石に疲れて声が出ない。
頭を撫でて応えてやると
みるちゃんもへなへなと力尽きてヘソマに寝転んだ。」

「……でもお尻エッチしてたらからね……♡」

そのまま二人でごろごろと休憩し
回復したら、どちらからとも言わず求め続けた。

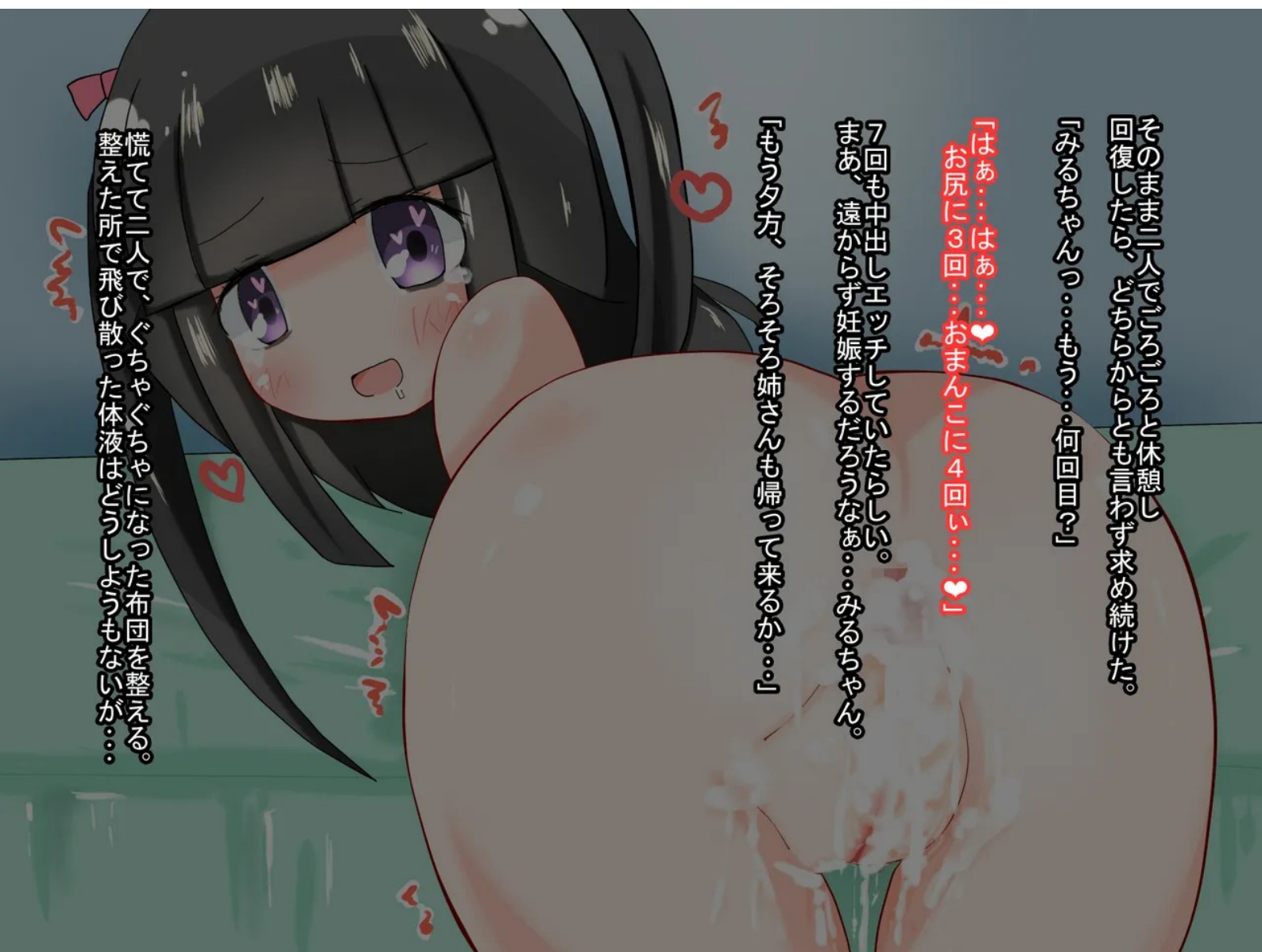
「みるちゃんっ…もう…何回目？」

「はぁ…はぁ…
お尻に3回…おまんこに4回い…

7回も中出しエッチしていたらしい。
まあ、遠からず妊娠するだろうなあ…みるちゃん。

「もう夕方、そろそろ姉さんも帰って来るか…」

慌てて二人で、ぐちゃぐちゃになった布団を整える。
整えた所で飛び散った体液はどうしようもないが…



そして数日が経ち…
遂に新しい職場への出勤日も間近に迫った頃…

いつもとは違った感じでみるちゃんが部屋に入ってきた。
どことなく落ち着きが無い感じで、そわそわしている。

「お、…おじさん…
あの、あのね…みるね…♡」

ベッドの上に座り、しゆるしゆると服を脱いでいく。
すっかり見慣れた裸をあらわにし
片足を持ちあげるようにして、大きく股を開く。

「しようか、みるちゃん」

そりゃあ俺もエッチする気満々なので
パンツ以外を脱ぎ捨て、みるちゃんに覆いかぶさると――

「みるね……
今日……危険日だよ……♡」

みるちゃんの言葉に、胸が大きく揺さぶられる。
一瞬、試されているのかと思ってしまうが、
期待に満ちたみるちゃんの目を見て確信する。

「おじさんっ……♡」

息を荒くした、みるちゃんも
それ以上は何も言わずに割れ目を見せつけ
期待した瞳で、俺をじつと見つめる。

「みるちゃん、今からさ
みるちゃんのおまんこに中出しするから」

「うん……うんっ……♡」

「みるちゃんのまんこに
おじさんの子供孕ませるからね」

「うん……♡」

パンツを下ろして
みるちゃんに息子を見せつける。

ガチガチに勃起して
今から眼前の雌を孕ませるための雄の肉棒。

「種付けセックスするぞっ……!!」

「おじさん…っ♡み、みる…っ♡
今から、お…おじさんの子供、妊娠する…っ♡」
「そっだよ、みるちゃんは今から
危険日の子宮におじさんの精子を
いっぱい中出しされて赤ちゃん孕むんだよ」

「も、もう欲しいっ♡おじさんはやっくっ♡
みる、孕むのっ♡、妊娠するのっ♡」

じゅく…♡

ただひたすらに子種を求めて
愛液で下半身をひちゃひちゃに濡らすみるちゃん。
この雌を孕ませたい、俺の精子を受精させたい——

「ふああああっん♡
きたっ♡おちんちんきたっ♡
みるの危険日おまんこにおちんちん入っちゃったあ♡」

「みるちゃん、まんこ締め過ぎ…♡」

処女膜を破った時と同じような
膣肉がむちゃくちゃに絡みついてくる。

「だってっ、だって♡妊娠♡
妊娠させてもらえるの♡孕みたいの♡」

完全に雌としての本能で動いてるな…
精子脳ならぬ子宮脳？

「ずぼずぼしてっ♡はやくはやく♡
みるの危険日おまんこで
いっぱい気持ち良くなってえ…♡♡」

おっぱい♡♡

みるちゃんの膣内を乱暴にかき回す。
発情し切ったおまんこは
奥までぐり込む様に無理矢理突き入れても
膣全体が痙攣しながら受け入れてくれる。

「おじさん♡おじさん♡はーい♡
ほんとにみるを孕ませようとしてる♡
みるを妊娠させようとしてる♡...♡」

「どうだよー孕ませるからねっ！
今日、今、もうすぐママになるんだよー」

「きゃああああん♡
孕む♡絶対孕む♡
卵子待ってるから...赤ちゃん作るの♡」

みるちゃんが繰り返す卑猥な言葉が
脳を溶かす程に雄の興奮を誘う。

ずっぽ♡

ずっぽ♡



「あつーおちんちん膨らんだっ♡
精子出るっ？みるを妊娠させちゃう孕ませ精液っ♡」

みるちゃんのおまんこは
もう俺の射精の兆候を完全に把握してるだ。

「どうだよ、もう射精するんだよ！
みるちゃんの危険日まんこに！
一発で絶対妊娠させてあげるからっ」

「孕んでいい？孕んでいい？
おじさん精子受精ちやうぶっ？」

「おまんこ♡みるのおまんこ♡
おじさん専用雌まんこ孕ませてええっ♡♡♡」

「あああつ、孕んで！俺の精子で孕めっ！」
「一番奥の子宮目がけて一氣に肉棒を押し込んだ。」





「ひやああああああんっ♡♡♡
おまんこ孕むっ、おまんこ孕んじやうううっ♡♡♡」

「いきながら孕むっ♡妊娠しゅるっ♡
危険日まんこで精子受精しちゃうっ♡♡♡」

ゴックン♡

ゴックン♡

♡

♡

♡

「孕んで…みるちゃんっ
受精してっ、妊娠してるっ…っ」
根元部分までしっかり押し付けて
亀頭と子宮口も密着させたまま精液を注ぐ。

あははは

あははは

ミミミ
♡♡♡

ミミミ

「してるっ♡今受精してるっ♡
危険日子宮まんこにっ…っ
どろどろ精液が卵子に向かっ
てっ…っ…来るっ♡」





「危険日子宮の中いっばいで
卵子の逃げ場所無いっ♡絶対孕んだっ♡」

「あっ、あっ……♡
妊娠してる……今、絶対妊娠してる……♡
おじさんの精子が、みるの卵子に……♡
ちゅぶつて受精したのお……♡」

ん

お



「おじさん♡」

確実に妊娠したよ、と目が言っている。
女の子は感覚的というか本能的にわかるのだろうか？

子宮の中を満たしてもおさまりきらずに
膣から溢れ出てくる精液の量を見れば
男の俺でも確実に孕ませたな、と思う。

ズブズブ♡

キュン♡

モロモロ♡

「でもおじさん...
まだまだ、し足りないよね...♡♡」

結局、求められるままに
お互いが雄と雌としての本能をぶつけ合った。

数えきれない程、精を注ぎ込み
動物の様に盛りまくった。

気づけば夜は更け
日が昇ろうとしていた…。

「そろそろ姉さんが起きる…朝ごはんを…って、うわ」
腰がガクガクと震えて立てない。

「みる、悪いけどちよっと起こしてくれ…腰が…」

「み、みるも…動けない…腰震えて…♡」

なんで嬉しそうに言うの。

そして二人してなんとかリビングにたどり着き――



腰痛を我慢しながら3人で朝食を囲む。
妊娠させてしまった以上、これから色々頑張らないと…

「ねーお母さん」

「お、なにになに？」

「受精しました、ブイ」

「えっ」

突然のカミングアウトに思わず箸を落とす。
というか口が塞がらずに、みそ汁がだばあと零れた。

「み、みみみるちゃんっあのそのえっと」

「ちくしょう、はいこれ」

姉がみるちゃんに1万円を渡す。

「おい『ワ』」

「くそっ、2ヶ月くらいは持つと思ったのに」

落ちる事前提の賭けなのはもう諦めたが
俺、2ヶ月で姪を孕ませるか否かで賭けられてんのか。

「ん？あんた何か言いたいことあんの？」

「いえ…これからお仕事頑張リマス…」

どうやら姪っ子との生活は
まだまだ始まったばかりらしい…。

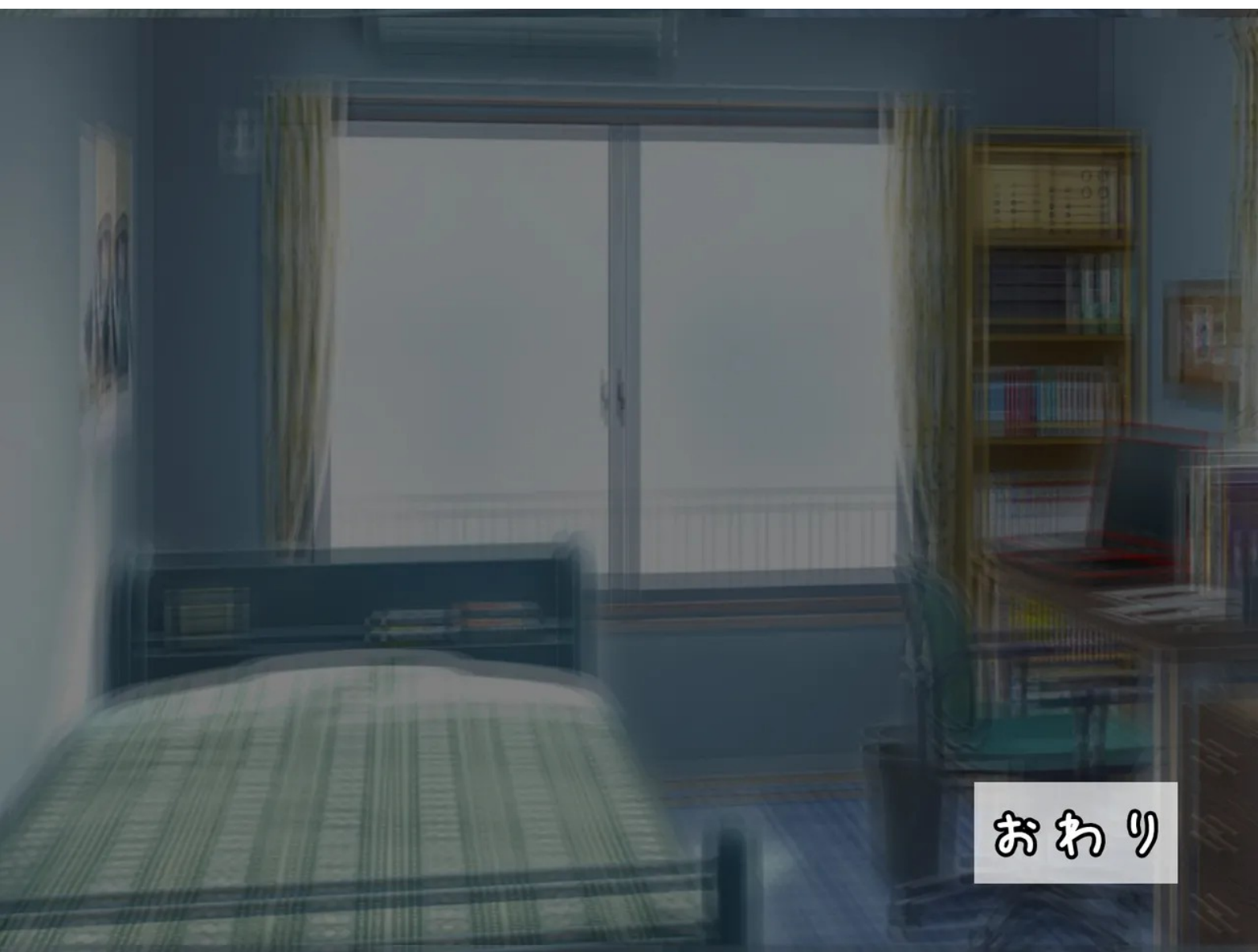
あ、もう姪っ子というか奥さんか――

「おじさん♡」

ニヨニヨ笑顔で見つめるみるちゃん。
――まあ、こんな人生も悪くないか。
慌てないでゆっくりいこうじゃないか。

「これからもよろしくね、パ・パ♡」

あ、慌てないで…頑張ろう…



おわり